

仏の心を心として

我等の目標

- その一……………
- その二……………
- その三……………
- その四……………
- その五……………

我等の目標 その三

「私どもは、仏の心を心として、真実愛を尚び、明るく嬉しく生きることを生活の目標に致しましょう。」

真実愛

我等の目標は

第一、一生涯求道する。

第二、その聞いたみ法を生活の上に打ち出してゆく。
と述べて来ました。そこで次にここにかかげた第三の目標即ち、自分の生活を成就してゆくと共に、我等の生活を成就してゆくことに及ぶのは当然であります。しかしてそれに答うるものは「真実愛」であります。

「人生を美しくするのは、真実愛である。

私が一番求めているのも、真実愛である。

私が一番に私に求めるのも『汝よ真実愛の人になれ』である。

真実愛は人生の光である。

人は唯、真実愛によつてのみ結ばれて一つになり得る。

過去の聖者は一人残らず、愛の人であったのだ。」

私は今、ペンを持ったままで、こんなことを次から次と考えていました。真実愛の問題はあまりに、人類に課せられた大きな問題であります。

真実愛の諸相

愛は、熱い血の流れであり、真実そのものであつて、算盤そろばんではじかれない、割り切れない、生命のたぎりであります。ですから、外からつけられるものではない、内から湧くものであります。人格の根底に動いているものであります。だから、自覚者は必ず愛の人であります。真実愛の問題について、一つの逸話もないような聖賢は一人だつてありません。

残忍は、得手勝手な、我慢な、邪見な人間は、それが、学問すればするだけ、富を持たせば持たすだけ、地位を得れば得るだけ、家庭や社会の癌になり、人を苦しめ悩まず、嫌な悪魔的存在となります。ですから愛の問題は人生の根本問題であります。寒い寒い冬の日の夕暮れ、冷たい冷たい雪や水の中、ひしひしと寒さが身にしみて来ます。一ぱいの温いお湯をくれる者もない。雪はますます降りつみます。しかも旅は遠い。何かことを成就したほどの人は必ず、こうした悲痛な境遇に立った経験を保持しています。

単なる感傷ではない。動きのとれそうもないほどの悲痛な境遇です。弱い人は自殺します。自殺しない迄も、重い荷物を下して使命を捨ててしまおうとします。

こうしたせつぱつまった時、多くの人は逃げてゆきます。堂々たる行列にはついて行っても、行き倒れを見た時は、かかわり合いになることを恐れたり、金がかかることを嫌ったりして逃げてゆきます。しかしその時、飛び出して来てこの人を助ける人もあります。一ぱいのお湯をもち、一椀の食物を供養し、光を捧げて、道を示してくれる仏の使いのような人が現れます。必ず現れます。

貧しい者が、真に人生の有り難さを感じるのはそうした経験を持つからです。私どもは人の真実愛によつてのみ、人生の歓びを知るのです。

しかし、かつて私どもが行詰つて道の真中に立つて、ともすれば弱くなったり、ためらったり、唯ぼんやりと泣いていたりした時、私にお湯をくれたり、優しい言葉をくれたりするかわりに、厳しい鞭をあてたり、鋭い言葉で叱り飛ばしたり、ことさらに冷たい態度をとったりされたことがあります。それをその時は情なく思つて恨んだり、誤解したりしたが、あとになって、しみじみとその慈愛を感謝せずにはいられなくなる時があります。

ここまで考えて来ますと、愛されるということと、愛を認識するということの区別をはつきり考えずにはいられません。私どもの内面に眼が開いていないならば、真実に通う窓が開いていないならば、如何に慈愛につつまれていても、それを受け入れることは出来ません。

愛することも難しいが、愛せられることはもつと難しい。

真実慈愛を認識する心こそ、ほんとうの愛ではありますまいか。

枯木には、肥料をやつても太りません。冬が来ても年輪を造りません。

邪見や我慢では、真実は受け入れられません。ここにおいて我等は愛を外に求めるより先に、我自身の世界を培い、掘り下げてゆくことに返らねばなりません。

「仏の心を心とする」大信心の天地に生まれ出でなければならぬ理由がここにあります。

仏教、特に如来本願に生かされる真宗において、大信心を一切の根底とするのはこのためであります。大信心とは、人間の内面の全き充足であり、燃焼であります。この金剛不壊の大信心のみが一切の上に、新しき真実愛を知るのであります。

信と愛

前には、真実愛の問題もしよせんは仏の心を心とする大信心によらねば解決の出来ないことを述べました。仏の心を心とするということが忘れられた信心は、人間の得手勝手でありませぬ。

「世の中には食うにも困るような人もいるのに、仏祖のおかげで安穩に食わして頂きます。」

こんな喜びを純粹な信だと思っている人があります。ルンペンの側を自動車で身の幸を念仏に結びつけつつ感謝して通られたのではたまりませぬ。信の不純は、すぐ愛の世界の不徹底、不純を具います。

愛憎

私どもの所へ泣いて来られる人の種類は沢山であります。一番多いのは家庭苦であります。家庭苦はたいがい、愛憎のもつれであります。非常時日本も苦痛には違ひありませんが、家庭非常時ほど深刻に人を苦しめるものはありません。

一寸帰りが遅かつたとて、妻にヒスをおこされて三日間も床についてしまわれる男。小姑鬼千匹ぶりを発揮されて、嫂が十二人も変わった家庭。嫁と姑のいがみ合い、等々の例をあげればきりがありませんが、それ等は全て愛に対する認識及び、生活の低いことから来るのであります。如来の智慧光によつて大否定の鉄槌を喰らうべきであります。一体正しからざる者ほど正しさを主張するものであります。親鸞聖人は「小慈小悲もなき身」と告白懺悔していられます。そこにこそ如来の大慈悲が生きているのであります。

自照の光

真実愛は必ず世の中を明るくします。金殿玉楼の中も、憎悪が充ちておれば、暗黒であり、賤の伏屋も慈愛が充つれば、楽土であります。

「明るく嬉しく生きる」ことは、我等の唯一の目標でなくてはなりません。

人間が集まっている以上、決して問題を絶対におこさないというわけにはゆきませぬが、しかし、本能我——即ち、貪欲や、瞋恚や、愚痴のみものを言わせて、内省もなければ、懺悔もない、煩惱生活のままに動く人が集まったのでは、問題の絶える暇がありません。

誰だつて、全身全霊煩惱ではありませんが、その八万四千の煩惱を、仏の光に照破されて、仏の心を心とする生活に転じて、そこに懺悔と感謝の大信海を見出すならば、その人を照らす光明が家庭の光、社会の光ともなります。かかる人の集まる所こそ、嬉しい明るい世界となります。

教えへの態度

仏の心を心とする生活、その生活者は必ず、自分の欠点や過失を注意されると、深い感謝を持ちます。しかし、仏の心の出ていない人は、当然な注意を受けても、必ず暗い顔をし、怒り、反抗し、あべこべに悪口をはき、あるいはしよげかえり、悲観し、自卑します。その反対に、人が少しでも褒めたり、認めたり、お調子にのせると、喜

び、自負し、自慢して自らの姿を失います。こうした人がいる家は、その人を中心に家を暗くします。かかる人は自分のしていることは何でも少しも悪くないと思つています。

仏の心を心とする人は必ず善知識を持っています。体は二つでも、心は一つの善知識を持つています。したがって、自分の善を褒められても、自分を知っていますから、善を忘れ、かえって恥じ、又悪を常に内観して、その教えの鏡に照らされていますから、悪にとどまりません。したがって善にも悪にも縛られないで、仏の心を心として生きてゆきます。かかる人は人をもつれてその家を明るくします。こうした教えに生き、仏の心を心として生きる人の側は、春のように暖かであり、黎明のような朗らかさと明るさを持ちます。

報謝の生活

自分全体を捧げきり、なげ出したほど、大きな深い愛の態度はありません。しかし、その人は決して小慈悲すら持ち合わせのないことを信知しています。自分を捧げきらず、投げ出さず、我慢の城に立てこもっている者ほど、自分は大愛の人で人は皆真実がないの、腐っているの、愛がないのと、わめき回ります。しよせん、自分の世界を暗くするものは、我慢、我欲、瞋恚、愚痴・・・自分の心以外にはないのに、それが深ければ深いだけ、明るく嬉しくない原因を自分以外に求めます。真実愛の枯れた人の心です。

仏の心を心とするとは、この我を内観して、我慢を見出し、仏の心に立つて生きる、報謝、大忍の生活のことです。